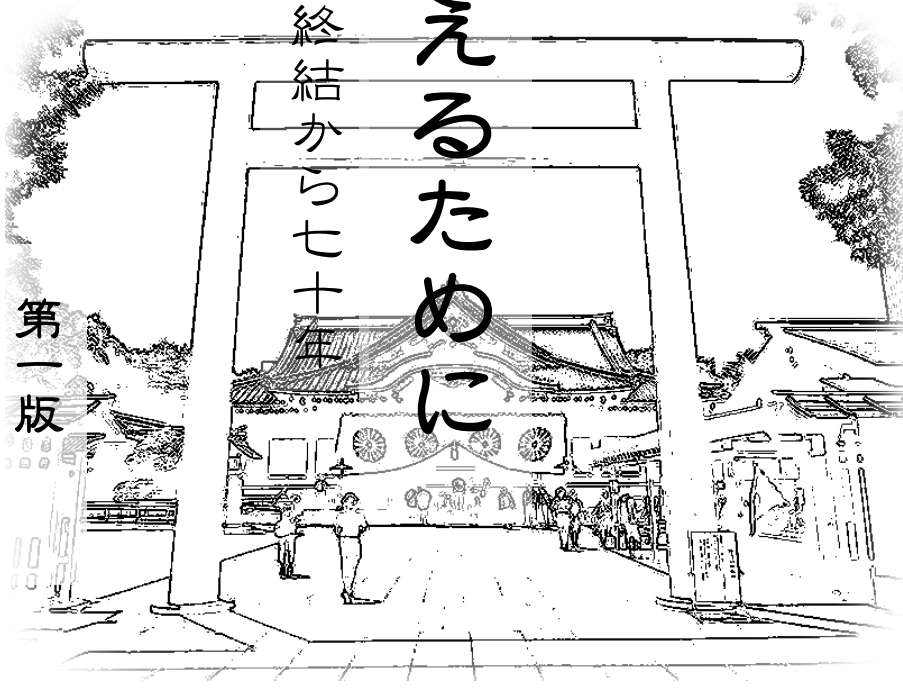


ご英霊の思いに 応えるために

大東亜戦争終結から七十



第一版

やぐら祭

平成二十七年三月

大東亜戦争終結から七十年が過ぎ、戦前や戦中の様子を直接知る人が少なくなってきました。春には日本各地で慰霊祭が執り行われます。今年には天皇后兩陛下が、パラオ共和国のペリリュー島へ慰霊のため行幸啓されました。それまで多くの日本人がペリリュー島の戦いを知らなかったのではないのでしょうか。その戦いは、硫黄島の戦い、沖繩戦とともに大東亜戦争の中でも特に悲惨な戦いでした。

戦後の教育により自虐史観が植え付けられ、日本の行為はすべて悪とまで教えられたなか、その時代に生きた人々が何を目にし、何を感じていたのか。そこにある大切な心をかみしめ、その志を受け継ぐことで我が国の未来のために確かな一歩を踏み出せるはずです。今、いくつかの戦いの記憶を辿り、英霊に対する感謝と慰霊の心をもって、我が国の国柄を未来へ守り伝えてゆくことを考えるきっかけになれば幸いです。

ペリリュー島の戦い

異国の地と我が国を守るために

情勢次第に悪化し、パラオ島防護の為

昭和十九年七月七日名譽の召集令状を受く

男子の本懐之に過ぐるものなし、又家門の誉なり

勇躍入隊 大君の醜の御楯として米英軍を撃滅せん

戦死の報ありても決して取乱さざること

魂は靖国の神として永久に皇国を守る

会ひ度くば靖国神社へ来れ

お前の身のことについては父とよく相談せよ

軍人の妻としての体面を保て

父母に孝養を頼む

身体に気をつけて朗らかにくらし

ながらくのお世話ありがとう 深謝す

昭和十九年七月八日

大詔奉戴日

貞子殿

貞夫

英霊の言乃葉五」靖国神社刊より

ペリリュー島の戦い

上記は、パラオ防衛のために召集を受けた仲西貞夫陸軍軍曹が、妻に宛てて書いた手紙です。情勢次第に悪化し「と仲西軍曹が書いたように、大東亜戦争開戦以降、破竹の勢いで勝利していた我が国も、米英をはじめとする欧米諸国の圧倒的物力に押され、戦況は徐々に悪化していきましました。東洋最大とも言われた二本の滑走路が敷かれた。パラオ諸島のペリリュー島は、日本軍にとつてはグアムやサイパンの後方支援基地として、日本の防衛上とても重要な拠点でした。一方、フィリピン奪還に総力をあげる米軍にとつても、フィリピンのすぐ東に位置する。パラオの日本軍基地の攻略が必要でした。パラオでの戦いはきつと激しいものになるけれど、国を守るため、故郷に残る大切な人を守

るため、たとえ死しても戦うのだという強い決意と覚悟が、仲西軍曹の手紙から感じ取れます。日本軍は、ペリリユー島を徹底して要塞化地下陣地化し、米軍の三日で陥落出来ると予想に対し、七十三日持ちこたえました。しかし一万一千人の戦死者を出し終結した。

一方米軍に対し約四十%の戦闘損害比率を記録した激しい戦いであったと言われ、その結果、その後の硫黄島戦、沖縄戦とともに、アメリカに「日本と戦うと被害は甚大になる」という認識を植え付けることになりました。

パラオは第一次世界大戦後、国際連盟の委任に基づき、我が国が統治を行いました。多くの日本人が移住して開発を行い、現地の人々に教育や予防接種の機会を設けるなど、パラオの生活、文化水準の向上に尽力しました。また、ペリリユーの戦いは戦争に巻き込まないため、民間人である現地の人々を他島に疎開させています。

それには、以下の様な話が伝わっております。(毎日新聞刊 サクラサクラより)

大東亜戦争のとき、その島には日本軍が進駐し陣地が作られた。島民はその作業に参加した。日本兵とは仲良くなって、日本の歌を一緒に歌ったりしたという。やがて戦況は日本に不利となり、いつ米軍が上陸してもおかしくない状況になった、仲間達と話し合った島民は代表数人と共に日本の守備隊長(中川陸軍大佐)のもとを訪れた。

自分達も一緒に戦わせて欲しい」と。それを聞くなり隊長は激高し叫んだという。帝国軍人が、貴様ら土人と一緒に戦えるか！」

日本人は仲間だと思っていたのに……。みせかけだったのか。裏切られた想いで、みな悔し涙を流した……。

船に乗って島を去る日、日本兵は誰一人見送りに来ていない。ところが船が島を離れた瞬間、なんと浜には日本兵全員が走り出てきた。そして一緒に歌った日本の歌を歌いながら、手を振って彼らを見送った。先頭には笑顔で手を振るあの中川隊長が。

その瞬間、彼は悟ったという。あの言葉は、自分達を救う為のものだったのだと……。



当時のパラオの首都コロール
(日本統治時代、道路を舗装するなどインフラが整備された)

硫黄島の戦い

〔昭和十九年六月二十五日妻・義井、子供達宛
此の手紙は他人の眼に絶対にふれさせぬ事又内
容をしゃべらぬ事

拝啓其の後は皆々お变りない事と思えます。私も毎日元気で過ごして居ますが、今居る処は*包頭や*広東とは比べものにならないひどい処です。暑さも広東以上で到着後五日か一週間位で皮膚は黒こげとなり、今迄にもう何遍も皮がむけ替りました。それに嫌やなのは湿気が強く汗はだくだく出るし、服でも何でもシットリ湿っていて不愉快至極です。水は湧水が全くなく全部雨水を溜めて使います。ですから何時もああ冷たい水を飲みたいなあと思えますがどうにもなりません。蚊と蠅の多い事は想像以上で全く閉口です。……………兵隊達は全部天幕露営か穴居生活です。穴居は風通し悪く蒸しあつくそれは大変です。藤田副官といつも枕を並べて寝ています。……………

*包頭・中国モンゴル自治区の都市

*広東・中国南部の州

上記は、硫黄島の戦いの指揮をとった、栗林忠道中将が硫黄島から、家族に当てた手紙の一部です。其の手紙は、軍人であると同時に、家族思いの夫であり、子煩悩な父であった。

栗林中将は、故郷の長野県松代では、戦後から今日まで、若い人を死にやっただ悪者にされていた。ところが実はこの栗林中将、アメリカでは大変なヒーローで、ブッシュ大統領の演説に出てきたり、かのクリントン・イーストウッドがわざわざこの人を主人公にして映画を作りました。その映画のお陰で、日本人の多くが初めて知ったのです。

二〇〇六年、硫黄島。

地中から発見された数百通もの手紙。それは六十一年前、この島で戦った男たちが、家族に宛てて書き残したものだ。届く事なかった手紙に、彼らは何を託したのか……………

戦況が悪化の一途をたどる一九四四年六月、ひとりの指揮官が硫黄島に降り立った。陸軍中将、栗林忠道……………アメリカ留学の経験を持ち、それゆえにアメリカとの戦いの厳しさを誰よりも知り尽くしていた男。本土防衛の最後の砦とも言うべき硫黄島の命運は、この男に託された。この戦いは本土攻撃の拠点としてぜひとも押さえたい場所でした。硫黄島が奪わ

なげう

れば、その飛行場から本土への空襲が可能になる。自分の命を擲つてでも、硫黄島を守り、故郷で暮らす父や母、愛する妻や子供たちを守りたい。硫黄島の陥落が一日延びれば、



硫黄島の星条旗

アメリカのワシントンDCのアーリントン国立墓地の海兵隊記念碑、即ち「硫黄島の星条旗」のモニュメント（六人の海兵隊員が星条旗を摺鉢山の頂上に立てる姿）は、ピューリッツァー賞を受賞した史上最も有名な報道写真をベースにした記念碑である。その記念碑の前で、日本人観光者がVサインをして、笑って写真をとっていることを考えると、日本人として歴史を知らなすぎるのいかげなものかといえませぬ。

自分のためではない、妻子供の為、見も知らない同胞のため、命を変えて、硫黄島を守ろうとし散華された二万人のご英霊、この戦いを日本人として忘れることは出来ませぬ。

我が国では、自国領内にもかかわらず、今も、一万二千人以上の遺骨が本土に帰ることなく眠っている。

一日爆撃が遅れ、爆撃が一日遅ければ、その一日分、大切な人たちの命を守ることができる。
四五年二月十九日、ついにアメリカ軍が上陸を開始する。その圧倒的な兵力の前に五日で終わるだろうといわれた硫黄島の戦いは、三十六日間にもおよぶ歴史的な激戦となった。
結果、日本軍は約二一、九〇〇人、米軍は約二八、〇〇〇人に及ぶ死傷者を出すなど、大東亜戦争屈指の激戦と言われた。まだ見ぬ我が子を胸に抱くため、どんなことをしても生きて帰ると妻に誓った西郷（一兵士）、そして彼らを率いた栗林も、軍人である前に、家族思いのごく普通の父であった。
しかし戦後、硫黄島におけるほぼ全ての戦死者の遺骨を収容したアメリカに対し、



硫黄島に集結したおびただしい数の米軍の艦艇

未来に向けて

先の大戦において、先人たちが決死の思いで守ろうとした国に、今私たちは生きています。しかし戦後、我が国では戦争だけでなく、国家や国防意識にまで忌避感が漂い、他国に対する警戒態勢や危機感が十分でなかったと言えます。

北方領土、竹島、尖閣諸島など、先人の覚悟の上に守られてきた我が国固有の領土を脅かす諸問題が発生し、今も未解決のままです。また、国民もその安全を脅かされています。

北朝鮮による日本人の拉致事件が発覚したとき、拉致被害者家族である横田早紀江さんは「日本は一体、国家なのか。国民を救うのが国の役割のはずなのに何故、救えないのか」と訴えたといっています。他国に国の守りを委ね、主体性を失ってきた戦後の風潮は、個人の利益を優先するあまり、公共心や他を思いやる心、自らを戒める心など、道徳心を欠いたと思われる様々な事象をも生み出したのかもしれない。そこには、国はなるべく個人に干渉することなく、個人の自由意思に基づいて個人は自分のために生きているという考えを支え、行き過ぎた権利の主張までも認めかねない憲法があることも否めません。

その憲法の第三章。国民の権利と義務の項を見るに、権利という文言は十五あり、一方義務はたった三しか出てこないことに納得せざるを得ません。

安倍総理は、断固として国民の生命と財産、領土を守るという決意のもと、そのための基盤を整えてゆくことを明言しておられ憲法改定に意欲的です。憲法があつての国では無く、国があつての憲法

現在の憲法はGHQが、一週間で作ったものです。乃ち日本国憲法は、日本人による日本人のための憲法ではなく、極端に言えばメイドインUSAなのです。しかもその内容は不完全で、従って憲法の解釈を巡って最高裁で争われるなど、極めて異常であると言わざるを得ません。

憲法というのは、だれが解釈しても不動のものであるべきです。

戦後七十年を迎え、私たちは当時を振り返り、この国の未来を託してかけがえない命を擲った英霊の大切な

思いをしつかりと受けとめ、日本らしい国づくりに向けて主体性をもって一歩を踏み出す責務があるのです。まさにそれこそがご英霊が、求めた日本ではないでしょうか。

一部に神社本庁発行「今を生きた記憶」より掲載

万倉護国神社社務所

平成二十七年三月